

合意形成談話における 同意表現

—台日接触場面を中心に

呉映璇

◆要旨

合意に至るプロセスは必ずしも順調ではない。反対意見を述べるときに、互いの関係を損なう恐れがあるからである。そのため、これまで合意形成における研究は、不同意や反対に重点を置くもの（梶本2004, 倉田・楊2010）が多くなされている。一方、合意が形成されるには、反対意見を表明するのみならず、同意もする必要がある、それにより合意形成という目的が完成できる。しかし、同意にはまだ解明されていないところがあり、それが接触場面では重要な役割を果たすことが考えられる。そこで、本研究では台日接触場面における合意形成場面の同意表現を明らかにすることを目的として調査を行った。その結果、日本語学習者は同意を表す際に、相づちを駆使して偏った同意表現を使用していることと、日本語母語話者の発話に依存し、同意を表明していることが示唆された。

◆キーワード

合意形成、同意、談話、接触場面、
台湾人日本語学習者

◆ABSTRACT

The process of consensus building is not necessarily easy as stating an opposing opinion might damage the relationship between the interlocutors. Thus, most of the researches about the consensus building focus on disagreement or opposing opinions (梶本2004, 倉田・楊2010). On the other hand, to achieve a consensus, in addition to the opposing opinions, there is a need to use various agreement expressions. However, there are still many aspects of agreement expressions in conversation left to be studied. It is believed that in contact situations the agreement has an important function. This study examines the agreement expressions in consensus building conversations between Japanese and Taiwanese. The results show that the Taiwanese Japanese learners have specific usage patterns when using backchannels, and express agreement according to the Japanese native speaker's utterances.

◆KEY WORDS

consensus building, communication,
contact situation, Taiwanese, discourse

Agreement Expressions in Consensus
Building Conversations
Based on the contact situation of
Japanese and Taiwanese
WU YING-HSUAN

1 はじめに

私たちは他者と共に何かを決める際、まず提案し、それについて話し合ったり、他人の意見に同意したり、反対したりして、やっと決めることができる。このような提案から話し合いを経て結論に辿り着く一連のやりとりを合意形成と呼ぶ。合意形成場面は生活の中で直面することが多い。しかしながら、合意に至るプロセスは必ずしも順調なものばかりではない。相手の意見に反対意見を述べるときに、互いの関係を損なう恐れがあるからである。そのため、これまで話し合いや討論など合意形成における研究は、不同意や反対意見に重点を置くもの(梶本2004, 倉田・楊2010)が多く報告されている。伊藤(2016)は、日本語学習者の合意形成談話の否定的応答に着目して分析を行った。その結果、学習者の否定的応答は少なかったことが明らかになった。呉(2016)は台日接触場面における合意形成場面の談話の特徴を明らかにすることを目的とし、話題の提起から、意見の表明、話し合い、合意に至るまでの合意形成談話を発話カテゴリーに基づいて分析した。その結果、台湾人日本語学習者と日本語母語話者のいずれの発話においても同意表現が多く出現しており、両者の同意の出現率に有意に差が見られたことを指摘した。また、中村(2011)は、会話参加者の間でどのように意見や評価を合わせていくかが会話の組織化の鍵となることを指摘している。つまり、合意を素早く形成するには、会話者は互いの意見について評価しあうことが重要であると考えられる。以上のような研究成果から、合意形成という目的が達成される際に、相手の意見に反対を表明するのみならず、同意を述べることにより、合意が形成できるようになるのではないかと思われる。したがって、合意が如何に形成されるかを見るには、不同意表現に限らず、同意表現に着目した研究も必要であろう。

また、グローバル化が進んでいる現在においては、異なる国同士の交流活動が盛んに行われるにつれ、異文化による会話様態の違いから誤解が生じることも予想されるため、接触コミュニケーション場面は重要視されるべきである。特に日本の近隣国である台湾は、近年日本との交流が以前にも増して頻繁になり、合意形成に直面する場面は今後より多くなると思われる。例えば、学校同

士の交換留学やワーキングホリデーなど民間の交流が挙げられる。台湾人と日本人が共に授業を受けることや同じ職場で接触する機会は少なくない。こうした交流の場が増えるにつれ、ビジネスやアカデミック場面以外に、授業での討論を始め、生活面の相談など合意形成の場面も増えている。そのため、より多くの場面を取り上げて研究する必要があると考えられる。

そこで、本研究では台日接触場面における合意形成場面の談話の同意表現に着目し、その実態を明らかにすることを目的とする。その解明を試みることによって、より順調に合意が行われることにも繋がると思われる。

2 先行研究

2.1 合意形成に関する先行研究

合意形成のような談話は研究者により、異なった命名と定義がある。例えば、合意形成、討論、話し合い、交渉、アーギュメントや課題解決などが挙げられる。吉岡(1993)の話し合いの定義、鈴木(2006)のアーギュメント会話の定義、合意形成マネジメント協会による合意形成の定義を参考に、本研究では話題提起から自分の意見を表明し、互いの意見について話し合いを経て、最終の結論に至るまでの談話を合意形成談話とする。

2.2 合意形成談話における同意、不同意に関する先行研究

前節でも述べたように、合意形成談話における同意、不同意に関する先行研究は、特に不同意に着目したものが多くなされている。梶本(2004)では、不同意の表明が、談話標識で話者の発話意図を効果的に相手に伝える「目的達成型」と否定的な応答の前に一度相手を肯定する「対人関係配慮型」の2種類に分類されている。ほかにも、接続表現や沈黙、笑いなどの表現で不同意を示す研究(伊藤2016, 大塚2003)が報告されている。

同意に関する研究について、矢野・伊藤(1999)は、共同作業時に収録された初対面会話をデータにして、同意・不同意表現を分析した。この研究から、同意表現は「私もそう思います」、「そうですねえ」、「うんうん」のような同意

語句と、対話において二人が共同で一つの話を作っていく共話のような、後発の話者が先発の話者に同意する同意共話の2種類が観察されている。同意語句は相手からの働きかけの発話に対する応答であるのに対し、同意共話は相手と共同で話を作っていくことであると述べ、同意語句よりも同意共話を用いた際、対話の相手がうまく同意を感じたことになると指摘している。一方、不同意表現については次の2種類が観察されたと指摘している。一方の話者の発話の後、もう一方の話者がすぐにその発話に不同意を表明する「相手発話への不同意表現」と、自分の意見を表明している間に、対話の相手が自分の意見にあまり同意していない様子を察し、会話中に自分で自分の意見を変えたり、取り下げたりする「自分の発話への不同意表現」である。しかし、共話という談話スタイルは日本語母語話者によく観察されるスタイルで、学習者の会話データにも同じ現象が見られるのか、同じ分類が適用されているのか、検証する必要があると考えられる。また、小松(2015)では、日韓接触場面の意見交換会話における同意表現を韓国人日本語学習者の日本語習熟度に着目し分析した結果、超上級の学習者は同意見の場合には様々な種類の同意表現を使う傾向があることと、対話の相手と異なる意見を持った場合、中級学習者より相手の意見に同意を多く行うことが分かった。さらに、小松(2016)は同意表現を「話し手の実質的な発話による同意表現」と、「聞き手の実質的な発話による同意表現」、「話し手の相づち的な発話による同意表現」、「聞き手の相づち的な発話による同意表現」の4種類に分類し、母語話者を含めたデータを観察した。その結果、超上級学習者と母語話者ペアは話し手と聞き手の役割を頻繁に交換しながら、会話をともに築いていく特徴があることが分かった。

以上の先行研究から合意形成のような結論に至るまでの談話の一端が明らかにされた。その中で、合意形成談話における不同意表現は、会話相手との関係を気まづくさせる恐れがあるため、今までは特に重要視されており、多くの研究がなされてきた結果、ある程度解明されている。しかしながら、合意形成は一連の相互作用から成し遂げられる談話であり、同意の発話があるからこそ、合意形成という目的を完成することができる。ゆえに、同意表現のさらなる研究の必要性があると思われる。

そこで本研究では友人関係である学習者と母語話者を対象にし、台湾人日本

語学習者と日本語母語話者との台日接触場面における合意形成談話による同意表現の実態を明らかにする。

3 研究課題

以上の先行研究と研究目的を踏まえ、本研究では台日接触場面における合意形成談話の同意表現を検討するため、以下のような研究課題を設ける。

RQ1 台湾人日本語学習者と日本語母語話者の同意表現はそれぞれどのようなものか。

RQ2 先行発話のタイプにより台湾人日本語学習者と日本語母語話者の同意表現は異なるか。

4 研究方法

4.1 研究データ

2014年12月に台湾の五つの大学でデータ収集を行った。20代友人関係のJFL^[註1]環境の台湾人日本語学習者(以下、TL)と日本語母語話者(以下、NS)を2名1組とし、計10組(20名)の会話データを収集した。研究協力者のNSは台湾の大学に在籍している日本人で、研究協力者のTLは、全員日本語能力試験一級あるいは、N1に合格しており、日本語学科に在籍している台湾人である。また、性差による影響を排除するため、会話参加者のペアは女性同士に設定した。会話のテーマはTLにとってもNSにとっても身近なものを設定した。「①住みたい国ベスト3を決める」、「②美味しい屋台料理ベスト3を決める」、「③仕事選びで重視する条件ベスト3を決める」、「④恋人選びで重視する条件ベスト3を決める」と「⑤理想の指導教員が持つべき条件ベスト3を決める」の五つの会話テーマである。二人で五つの中から一つを選び、そのテーマについて話し合いを行い、二人共通のベスト3を決めるように指示した。事前に用意した会話テーマが書いてある紙を協力者に渡し、各会話テーマの意味、内容と収録時間を説明し、協力者の同意を得た上で、会話内容を録音した。収録時間は

合意が形成されるまでとしており、厳しく制限せず、協力者に任せた。

4.2 分析方法

4.2.1 同意発話の認定

TLとNSによる全ての会話を録音、文字化^[註2]し、その文字化資料を談話分析の観点から量的に分析した。分析対象とする発話の区切りについて、本研究では杉戸(1987:83)による発話文の定義を採用した。杉戸は、発話を「一人の参加者の一まとまりの音声言語連続(笑い声や短い相づちも含む)で、他の参加者の音声言語連続(笑い声や短い相づちも含む)とかポーズ(空白時間)によって区切られる単位」と定義している。この定義にもとづき発話を認定し、佐藤(1996)の「発話カテゴリー」及び平野(2011)の「発話の型と発話カテゴリー」を参考にして、収集した合意形成談話の全発話を20カテゴリーに分類した^[註3]。次に、主張や意見表明、結論のまとめに対する反応、すなわち同意に分類した発話を抽出し、本研究の分析対象とした。以下に認定例を提示する。

【会話例1】

- | | | | |
|------|-----|-----------------|-------|
| 5 | NS4 | どんな人が好き? | ⇒意見要求 |
| 6 | TL4 | 性格 なんだろう 大人しい人↑ | ⇒意見表明 |
| 7 | NS4 | そうなんだ | ⇒注目表示 |
| 8 | TL4 | NS4は? | ⇒意見要求 |
| 9 | NS4 | 優しい人 | ⇒意見表明 |
| → 10 | TL4 | うんうんうん そうそうそう | ⇒同意 |

4.2.2 同意表現の種類

杉戸(1987)は発話を「相づち的な発話」と「実質的な発話」の2種類に区別している^[註4]。また、相づちの機能の一つが同意であることは堀口(1988)^[註5]で指摘されている。小松(2015)では、中井(2003)のターンの定義を応用し、話し手と聞き手に分けて同意表現の分析枠組を用いているが、郭(2003)は「同意の表示」を果たしている相づちの機能には「聞き手と話し手との共存部分」があることを指摘している。そもそも合意形成の場面は会話者がお互いに意見を交換する場面で、ときに話し手として、あるいは聞き手として会話に参加して

いるため、話し手と聞き手ははっきりと区別できないだろう。つまり、合意形成の場面では一人の話者が一つの立場を維持することが不可能である。そこで、本研究は話し手と聞き手を区別せず、同意表現の種類の分析を試みた。

以下に各種類の使用例を提示する。実質的な発話と相づち的な発話については、本研究では杉戸(1987)の定義を採用する。

A. 実質的な発話による同意表現

- 82 NS2 えでもやっぱ笑顔の人の方がいいな
→ 83 TL2 その方可愛いかも

B. 相づち的な発話による同意表現

- 41 NS8 自分がイケメンだなと[思えばいいじゃない
→ 42 TL8 [そうそうそう
43 NS8 好きになったときに あイケメンだなと思えたい

C. 相づち的な発話+実質的な発話による同意表現

- 95 TL8 趣味が同じのも大事
→ 96 NS8 そう 趣味がある人も大事だと思う

4.2.3 相づち的な発話

相づち的な発話の認定と表現形式において、大浜(2006)では、以下4点の認定基準を提示している。

- (1) 基本的には表現が異なれば別の種類の相づちとする。例：そうね≠そうだね。
- (2) 複数の表現が同時に使用されるものについては、表現の種類数を問題にする場合には分割し別々に集計する。例：「あーそうなんだ」は「あー」と「そうなんだ」の2件とする。
- (3) 複数の単語からなる慣用句はそのままの形で1種類とする。
- (4) 同じ表現が2回あるいはそれ以上重ねられて繰り返される場合は、分割せず、そのまま1種類とする。但し2回以上はすべて同じ種類とする。例：「うんうん」=「うんうんうん」≠「うん」。 (大浜2006:166)

また、相づちの表現形式も大浜（2006）を参考にする。ただし、同意の機能が含まれた「うん系」や「はい系」のような感声的表現以外に、相づちやフィルターと判断しにくい感声的表現もあるため、音声データを基に、フィルターと判断されるものや、同意の機能が働かないものは分析対象外とした。本研究ではこれらの認定基準を採用し、相づち的な発話を抽出し、コーディングする。以下に相づち的な発話のコーディング例と、対象外とした例を提示する。

①B. 相づち的な発話：「そう」連続 ⇒1種類

173 NS9 これ↑一番が（。）自分の目標を持って人
→ 174 TL9 そうそうそう

②B. 相づち的な発話：「はい」「そうですね」 ⇒2種類

67 NS10 でもアメリカのニューヨークシティとか すごく憧れるんだけど
も1人で行くならちょっと恐くてなんか旅行で行く分にはいいけど
住みたいというふうになると ちょっと怖いかなっていうイメージが
→ 68 TL10 はい そうですね

③B. 相づち的な発話：「確かに」「前発話の繰り返し」 ⇒2種類

79 TL6 人間関係 例えば 仕事を探す前に会社はどんな人間関係が ある
か分からないでしょう
→ 80 NS6 確かに分からないhhh

④フィルターと考えられるもの ⇒対象外

82 NS2 えでもやっぱ笑顔の人の方がいいな
→ 83 TL2 あその方可愛いかも

4.2.4 同意表現の先行発話

同意表現は相手の言うことを聞き、それを理解し、自ら同意のサインを送るというより自発的なものがある一方で、相手からの同意を求める発話に対する応答のようなより受動的なものもある。楊（2012）は、話者が自身の領域にある意見や感想を述べる際に、同意要求の発話を用いることで、参加者間の共同認識を確認していくプロセスによって、より親密度の高い会話ができると述べている。また、小松（2016）は、情報や意見を交換し合い、互いの思考を深め

るような会話では、相互作用による会話の特徴を明らかにする必要があると指摘している。相互作用による同意表現を明らかにするためには、同意表現の直前にある相手が発する先行発話を観察する必要がある。同意表現の先行発話と考えられる2タイプの発話を表1に示す。

表1 同意表現の先行発話

先行発話	例
I 主張、意見（に対する同意） （要求なし→同意）	→ 95 TL8 趣味が同じのも大事【意見を述べる】 96 NS8 うん 趣味がある人も大事だと思う
II 同意要求（に対する同意） （要求あり→同意）	→ 71 TL2 優しさの方が大事でしょう？【同意要求】 72 NS2 うん大事

Iは相手からの先行発話では同意を要求されていないが、自発的に同意を表明するものであるのに対して、IIは相手の要求があってから、同意を表明するものである。本研究ではIとIIを文末の表現形式で分類した。同意要求の文末形式においては連沼（1995）^[注6]を採用した。

5 結果と考察

TLとNSにおける10組の合意形成談話の同意表現を抽出し、分析対象となった同意の発話は、TLの102発話に対して、NSは68発話である。

5.1 同意表現の種類

まず、TLとNSの合意形成談話での同意表現の種類の出現率を図1に示す。

図1で示したように、合意形成談話による同意表現の種類について、TLの出現率がNSを上回るのは、「B.相づち的な発話」である。一方、NSがTLより多く見られるものは、「A.実質的な発話」と「C.相づち+実質的な発話」である。そこで、同意種類の出現率にTLとNSとの差が統計的に有意であるかどうかを見るためにt検定を行った。その結果、「B.相づち的な発話」において、有意傾向が見られた ($t(18) = 1.78, p < 0.1$)。「B.相づち的な発話」にはTLの方がNSよりも高い出現率を示した傾向が見られた。有意傾向が観察された「B.相づち

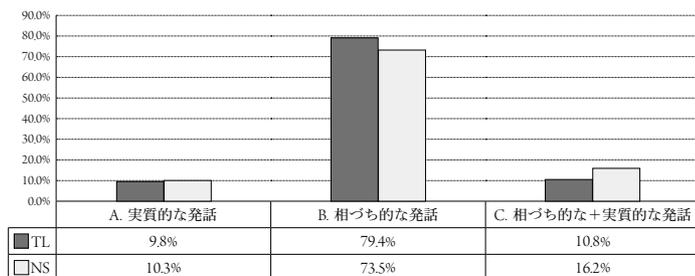


図1 TLとNSの合意形成談話による同意表現の種類の出現率

的な発話」に属する発話には、「はい」、「うん」、「そう」、「確かに」のような相づちもあれば、前発話の繰り返し発話もある。

次に、本研究で観察されたTLとNSの相づち的な発話の表現形式を表2に提示する。

t検定の結果、両者の間に「そうそう（そう連続2回以上）」($t(18)=2.11, p<0.05$)と、「繰り返し」($t(18)=2.11, p<0.05$)に有意差、「確かに」($t(18)=1.88, p<0.1$)に有意傾向があることが分かった。すなわち「そうそう（そう連続2回以上）」と「繰り返し」はTLの方がNSよりも高い出現率を示す傾向があるのに対して、NS

表2 TLとNSの同意における相づち的な発話の表現形式

表現形式	TLの出現回数	NSの出現回数
うん	24	25
うんうん（うん連続2回以上）	7	8
はい	11	1
はいはい（はい連続2回以上）	1	0
いい	1	0
いいいい（いい連続2回以上）	0	1
そう	12	6
そうそう（そう連続2回以上）	13	1
そうだね	7	6
そうね	2	2
そっか	1	1
まあ	2	2
ね	1	1
確かに	2	11
繰り返し	34	15

の同意表現である「確かに」の出現率はTLよりやや高いことが窺えた。

まず、本研究のデータから有意差が観察された「そうそう（そう連続2回以上）」について、TLは相づち的な発話の「そう」を連続して使うことによって、相手の意見に強く同意する傾向があることが示唆された。以下、会話例を提示し詳しく説明していく。

【会話例2】

85 TL6 ん：給料は一つ また何か
 86 NS6 あと（）なん や、休み↑[なんかhhh
 → 87 TL6 [あ 休み そうそうそうそう

会話例2は、仕事選びで重視する条件に関する話題である。発話85では、TL6は条件の一つとして「給料」を挙げ、さらに「また何か」とNS6に意見を要求している。NSは発話86で「休み」も重視する条件として自分の意見を表明している。それを聞いたTL6は発話87で「あ 休み そうそうそうそう」と、「休み」を繰り返してから「そう」を連発して相手の意見に強く同意する発話が見られた。

一方、同じ「B.相づち的な発話」でも、NSは「確かに」のような簡潔でより肯定的な同意を表明する様子が本研究のデータではしばしば見られ、有意傾向も観察された。会話例2では、NSの「確かに」の会話例を示す。

【会話例3】

102 TL6 休暇 ん：また何か
 103 (4)
 104 TL6 ん：会社のイメージ
 → 105 NS6 あ：確かに

会話例3では、発話102でTL6が、仕事選びで重視する条件として休暇以外に何か条件があるか、対話相手のNS6に意見を求めている。NS6はすぐに意見を表明しておらず、4秒の沈黙を経て、TL6は発話104で「会社のイメージ」と述べて

いる。それに対して、NS6は「あ:確かに」とTL6の発話に同意する様子が窺える。

また、本研究のデータからも両者に有意に差が観察された「繰り返し」について、TLは対話相手であるNSの発話に依存して同意を示す傾向があると考えられる。以下会話例3でTLの「繰り返し」の例を提示する。

【会話例4】

72 NS7 まあ三ぐらいなんじゃない 見た目
→ 73 TL7 見た目 三

会話例4では、発話72で、NS7が恋人選びで重視する条件として、「見た目」が三位であることをTL7に同意を要求している。それに対して、発話73で、TLは「見た目 三」と相手の発話で出てきたことばを繰り返して同意を表明する様子が見られた。

上記以外に、合意形成談話において最も重要な部分と言われている、合意を得る発話、すなわち合意形成の結論に当たる同意発話は、繰り返しを用いて同意を示す例が今回の研究でもしばしば見られた。以下に本研究のデータによる合意形成直前に現れた同意表現を提示する。

【会話例5】

304 NS4 一位 () 性格=
→ 305 TL4 =一位性格 ⇒前発話の繰り返し
306 NS4 二位
307 TL4 () 顔
→ 308 NS4 顔 ⇒前発話の繰り返し

会話例5では、発話304で、NS4がこれまで話し合ってきた恋人選びに重視する条件をまとめようとしている。「一位性格」の発話に対して、発話305でTL4は「一位性格」と同意をしている。発話308も前の発話による同意表現であると考えられる。ただし、本研究は開始部、展開部、終結部に分けて分析していないため、発話位置による同意発話の特徴が異なるかについては明らかに

できない。今後は合意が形成される直前に現れた同意発話のさらなる研究が必要であると思われる。

小松 (2015) は、超上級NNSは同意表現を偏りなく用い、場合によって各種類を使い分けていることと、中級NNSは相手のターンを侵さない同意表現を多用し、聞き手として会話に参加している特徴があることを指摘している。しかし、本研究の結果からは、上級学習者において偏って使用している同意表現が見られ、偏った相づちの種類(「そうそう(そう連続2回以上)」)を使用する傾向と、日本語母語話者の発話に依存し(繰り返し)、同意を表明する傾向が示唆された。これにはいくつかの理由が推測される。まず、小松(2015)の対象者は韓国語を母語とする日本語学習者で、本研究の対象者は中国語を母語とする台湾人であるため、母語に影響されている可能性が考えられる。もう一つの理由としては、本研究は台湾でデータ収集したため、JFL環境で日本語を学ぶ学習者は母語話者との接触がJSL環境の学習者より少なく、小松(2015)と異なる結果になったことが考えられる。さらに、本研究の対象者は中級以上、超上級に達する前の上級学習者であるため、超上級学習者と異なった結果になり、中級学習者と完全に一致した結果が見られなかったとも考えられる。今後は母語面との比較と、異なる学習環境をさらに見ていく必要があると思われる。

5.2 先行発話のタイプ

次に、先行発話のタイプ別のTLとNSの同意の出現率を図2に示す。

図2で示したように、先行発話の形式に対する同意について、TLとNSが「I 主張、意見に対する同意」と、「II 同意要求に対する同意」においてほぼ同じ出現率であることが分かった。なお、統計的に出現率の差異を見るためにt検定を行ったが、有意差は見られなかった。TLもNSも「II 同意要求に対する同

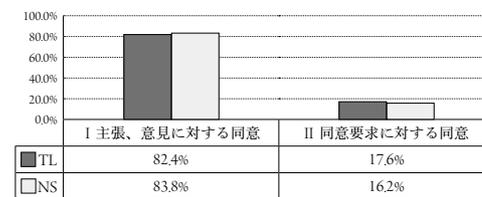


図2 先行発話のタイプにおけるTLとNSの同意の出現率

意」より、「I 主張、意見に対する同意」の出現率ははるかに多い。つまり、TLもNSも相手が要求していないにもかかわらず、自ら同意を表明していることが分かる。これは、相手に対しての配慮であると考えられる。小松(2015)では、同意表現には同意の意味を相手に伝える他に、相手に安心感を与える役割もあると指摘している。本研究のこの結果から、TLもNSも同意を表明する際、相手に要求されなくても自発的に同意を多く示すことによって、相手が安心して意見を述べられる場を作っていると考えられる。

次に、同意表現の全体像をより明らかにするため、先行発話と同意表現の種類との関係を検討する。以下に、TLとNSにおける先行発話と同意表現の種類の比較図を示す。

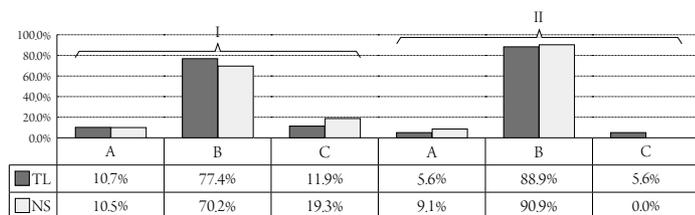


図3 TLとNSの先行発話と同意表現の種類^[注7]

図3で示したように、先行発話のタイプに関係なく、同意表現の形式についてTL、NSともに「B相づち的な発話」を多用することが分かった。なお、統計的に差異を見るために χ^2 乗検定を行ったが、有意差は見られなかった。

6 日本語教育への示唆と今後の課題

本研究により、台日接触場面における合意形成談話での同意表現の一部が明らかになった。台湾人上級日本語学習者は相づちを駆使して同意を表す際に、偏った同意表現を多用すること、また、日本語母語話者の発話に依存し、同意を表明することが示唆された。このことから、JFL環境の台湾人日本語学習者を指導する際には教師は、本研究で明らかになった結果を踏まえ、相づちによる同意表現の多様性と、自分のことば(実質的な発話)による同意表現など、より多彩な同意

表現を学習者に意識させる必要があると言えるのではないかと。明確かつ多様な同意表現を使うことによって、より順調に合意が行われることが期待される。

なお、本研究で取り扱った日本語母語話者は接触場面での日本語母語話者であるため、母語場面での母語話者の場合、本研究とは異なる結果が予想される。つまり、本研究ではあくまでも日本語母語話者の様相の一部しか明らかにしていないため、日本語母語話者の全貌をより解明するには今後さらなる研究が必要である。また、本研究は分析対象が10組のみであるため、結果を一般化するにはさらにデータを増やす必要がある。今後の課題としたい。(お茶の水女子大学大学院生)

注

- [注1] …… JFL: Japanese as a foreign language (外国語としての日本語)
JSL: Japanese as a second language (第二言語としての日本語)
- [注2] …… 文字化に用いた記号
? 上昇イントネーションを伴う質問
↑ 文中上昇イントネーション
: 音の引き伸ばし (:の数は長さを表す)
() / (半角数字) 沈黙/沈黙の秒数(例:(2) = 沈黙2秒)
h 笑い
[] 同時発話するときの重なり
- [注3] …… 発話の型(7つ): I提示型、II評価型、III質問型、IV応答型、V補強型(説得)、VI管理型、VIIその他; 発話カテゴリー(20個): ①主張、②見解表明、③反対、④同意、⑤意見要求、⑥確認要求、⑦説明要求、⑧意見表明、⑨確認、⑩説明、⑪理由、⑫情報提供、⑬事実指摘、⑭勧誘、⑮話題提示、⑯精緻化、⑰まとめ、⑱困惑、⑲注目表示、⑳感情表明
- [注4] …… 相づち的な発話: 「ハー」「アー」「ウン」などの応答詞を中心とする発話、繰り返す、オーム返しや単純な聞き返しの発話、「エーッ!」「マア」などの感動詞だけの発話、実質的な内容を積極的に表現する形式を含まず判断・要求・質問など聞き手に積極的なはたらきかけもしないような発話。実質的な発話: 相づち的な発話以外の種類の発話。なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含み、判断・説明・質問・回答・要求など事実の叙述や聞き手へのはたらきかけをする発話。(杉戸1987:88)
- [注5] …… 堀口(1988)では、相づちの機能を「聞いている」、「理解」、「同意」、「否定」、「感情表出」の五つと捉えている。
- [注6] …… 確認用法として「だろう」「じゃないか」「よね」が挙げられている。
- [注7] …… A: 実質的な発話 B: 相づち的な発話 C: 相づち的な発話+実質的な発話

参考文献

- 伊藤亜希 (2016) 「習熟度の異なる日本語学習者の合意形成談話における接触表現—肯定的応答と合意形成過程に着目して」『広島大学大学院教育学教育科学研究科紀要 第二部』65, pp.193–202. 広島大学大学院教育学教育科学研究科
- 大塚淳子 (2003) 「日本人大学生のグループ討論における結論生成と進行役の役割」『大阪大学日本語・日本文化』29, pp.147–159. 大阪大学日本語日本文化教育センター
- 大浜るい子 (2006) 『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』淡水社
- 郭未任 (2003) 「自然談話に見られる相づちの表現—機能的な観点から出現位置を再考した場合」『日本語教育』118, pp.47–56.
- 倉田芳弥・楊虹 (2010) 「討論における中国人学習者と日本語母語話者の不同意表明の仕方—構成要素の観点から」『言語文化と日本語教育』39, pp.158–161. 合意形成マネジメント協会
- 小松奈々 (2015) 「接触場面の意見交換会話における同意表現—日本語熟達度による比較から」『留学生教育』20, pp.19–28.
- 小松奈々 (2016) 「意見交換会話における同意表現の使用—超上級学習者の接触場面と中級学習者の接触場面の比較から」『日本学報』109, pp.1–17.
- 呉映璇 (2016) 「接触場面における台湾人と日本人による合意形成談話の特徴」『人間文化創成科学論叢』19, pp.29–36. お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
- 佐藤公治 (1996) 『認知心理学からみた読みの世界—対話と協同的学習をめざして』北大路書房出版
- 杉戸清樹 (1987) 「談話行動の諸相—座談資料の分析」『国立国語研究所報告92』国立国語研究所
- 楳本総子 (2004) 「提案に対する反対の伝え方—親しい友人同士の会話データをもとに」『日本語学』23(10), pp.22–33.
- 鈴木志のぶ (2006) 「日本語学習者によるアーギュメントの特徴—上級者・超級者間の差異」『Speech Communication Education』19, pp.95–112.
- 中井陽子 (2003) 「言語・非言語行動によるターンの受け継ぎの表示」『早稲田大学日本語教育研究』3, pp.23–39.
- 中村香苗 (2011) 「会話における見解交渉と主張態度の調整」『社会言語科学』14, pp.33–47.
- 蓮沼昭子 (1995) 「対話における確認行為—「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」『複文の研究 (下)』pp.389–419. くろしお出版
- 平野美恵子 (2011) 「共生日本語教育実習における実習生間の言語的共生化過程の研究」お茶の水女子大学博士論文
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64, pp.13–26.
- 矢野博之・伊藤昭 (1999) 「同意・不同意表現のための談話タグに関する一考察」『人工知能学会誌』14, pp.290–295.
- 吉岡泰夫 (1993) 「言語行動としての話し合い—目的遂行のためのコミュニケーション方略」『日本語学』12, pp.21–29.
- 楊虹 (2012) 「初対面会話における「同意要求—応答」の連鎖的分析—共感構築の観点から」『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』63, pp.119–133. 鹿児島県立短期大学
- Mori, J. (1999) *Negotiating agreement and disagreement in Japanese: connective expressions and turn construction*. Amsterdam: Jahn Benjamins.